

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設番号	66-0628
施設名	桜台保育園
施設所在地	町田市小山田桜台1-18
法人名	社会福祉法人やすらぎ会

1. 活動のテーマ

<テーマ>

樹と木

<テーマの設定理由>

当園では長年、木に親しむ保育を継続しており、子ども達は木に触れたり、木工や創作活動を通して、楽しさや豊かさを実感してきました。そのなかで最近、「木材ってどこからきたの?」「この木の元はなに?」といった、木の“始まり”に関心をもつ子ども達の姿が多く見られるようになりました。そこで今年度は、木材の元となる「樹木」や「森そのもの」へと視点を広げ、木がどのように育ち、どんな恵みとして私たちの暮らしにつながっているのかを、実際に森に足を運ぶ体験を通して感じ取ってほしいと考えました。子ども達の気づきが、暮らしの中の“木”へのまなざしを深めていくような活動を目指して、今年度のテーマを『樹と木』としました。

2. 活動スケジュール

7月木の年輪でスタンプアート
9月園外活動での親子スタンプ体験
11月奥多摩木こり遠足
12月木こり遠足での思い出制作
12月ものづくり（素材丸太）
2月木製看板制作

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

ペン、丸太素材、スタンプ用木材、アクリル絵の具、布用インク、ノコギリ、紙やすり、制作シート、ポスカ、看板用木パーツ、木工ボンド、記録用タブレット など

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

本年度は「樹と木」をテーマに、木材だけでなくその元となる樹木や森への関心を深めることを目的として、様々な活動を行いました。

7月には、木の年輪を活用したスタンプアートを実施しました。木の断面に触れながら模様の違いや面白さを感じる中で、「線が違う」「同じ木でも形が違う」といった気づきが生まれ、木の特徴への興味関心が芽生える活動となりました。

当初は9月の園外活動において奥多摩での木こり遠足を予定していましたが、昨今のクマ出没の影響を踏まえ、安全面を考慮し実施時期を変更しました。そのため9月は別のキャンプ場へ行き、7月に行ったスタンプ体験を親子で再度実施しました。繰り返し活動を行う中で、「この模様は前と違う」「木によって固さが違う」など、比較しながら考える姿が見られ、気づきがより深まっていきました。

その後、木こり遠足は11月に実施し、実際の森林に足を運びました。木が育つ環境や森の様子を体感する中で、「どうしてこんなに大きくなるのか」「どこから水をもらっているのか」といった問いが生まれ、木材の背景にある自然への理解を深める機会となりました。

また、遠足で扱った丸太については、当初は園で皮むき体験を行う予定でしたが、時期的に手作業で皮をむくことが難しい状態であったため、事前に皮をむいた状態で用意していただきました。園ではその素材を活用し、12月に遠足の思い出制作や丸太を使ったものづくりを行いました。実体験をもとに制作する中で、森での出来事を思い出しながら表現する姿や、木の性質を意識して扱う様子が見られました。

2月には、これまでの活動の集大成として木製看板制作を行い、自分たちの経験や気づきを形にする活動へとつなげました。

これらの活動を通して、子ども達は木材としての「木」だけでなく、その背景にある「樹」や「森」へと関心を広げ、「触れる→気づく→比べる→問いをもつ→表現する」という探究的な学びのプロセスを積み重ねて

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

・スタンプ活動では

「この線なに?」「こっちはぐるぐるしてる」「こっちのほうがきれいにうつるよ」

など、模様の違いに気づきながら友達同士で見せ合う姿が見られた。

また、「こっちはかたい」「これあんまりうつらないね」

と、実際に試しながら比べるやりとりも見られた。

・木こり遠足では

「なんでこんなに大きいのか?」「この木、何歳?」

といった声上がり、保育者が「どうやって大きくなるんだろうね」

と応じることで、やりとりが広がっていった。

・森の中では、

「こっちにも同じ木あるよ」「でもちょっと違うね」

と、気づきを伝え合う姿も見られた。

・制作活動では

「あのときの木だよ」「こここうしたらいいんじゃない?」

と会話しながら取り組む様子があり、「いいにおいする」「ちょっと重い」

といった感覚も共有されていた。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

木に触れる体験を重ねる中で、子ども達は見た目や感触の違いに気づくだけでなく、「なぜだろう」と疑問をもつ姿へと変化していった。体験を繰り返すことで、気づきが深まり、比較したり考えたりする姿が自然と見られるようになった。

また、実際に森へ行く体験が加わることで、それまでの活動で得ていたイメージと実体験が結びつき、子ども達の興味や問いがより具体的になっていったことを感じた。

活動の中では、保育者が答えを伝えるのではなく、子どもの気づきや疑問を受け止め、問い返していく関わりを行うことで、子ども自身の考えが広がっていく様子が見られた。

今回の取り組みを通して、素材としての「木」にとどまらず、その背景にある「樹」や「森」へとつながる体験を意図的に組み立てていくことの重要性を改めて感じた。また、環境や時期の変化に応じて活動内容を柔軟に調整することも、子どもの学びを継続していく上で大切であると気づいた。